

隠岐と俳人

—— 朱鳥・源義・八束 ——

日野雅之

野見山朱鳥

昭和三十七年十一月、四十四歳の野見山朱鳥は第一隠岐丸(四百トン)で隠岐へ船路を取った。昭和四十年八月から隠岐空港が開設された。

朱鳥主宰の俳誌『菜穀火(ながらび)』の昭和三十八年三月号の随筆「隠岐紀行」の文の一部と俳句を紹介する。昭和三十七年十一月二十五日から八日間の旅日記である。

旅は時雨に初まっていた。

流人船航きし銀河の下を航く

冬波をかぶり現はれ怒濤隠岐
神等去出の夜の銀河の海を来し

大会(隠岐島俳句大会)後、寿(ことぶき)という料亭で親睦会がひらかれた時に、隠岐随一の民謡歌手である福浦くに子の「しげさ節」「どっさり節」を聞いた。私の側に座った彼女は中背のぼってり肉づいた若い女である。

忘れしやんすな 西郷の港

港の灯影が

主さん恋しと泣いている

しげさ節ききてしぐれの隠岐に泊つ

古面裂け礎石濡らすは時雨のみ

玉若 醉命の杉に時雨荒れ

朱房結う 駅鈴冬の響きもつ

那久

(なが・旧都万村那久・現・隠岐の島町那久)

(隠岐)支庁の自動車で馬交(うまかわせ)峠を越え

島を縦断して都万(つま・旧都万村)に出て、那久の斎

藤一菜の家を訪ねた。皆吉爽雨(みなよしそう)の雪

解(ゆきげ)の古い俳人で、空稲架の立つ小川を前にし

て、元禄から遠からぬ頃、建ったという民家に住んでい

た。那久の家は皆屋号があつてこの家は京屋というの

である。

炉が焚かれた。櫓、朱櫓、瑞櫓、椿などの櫓が十文字

に置かれて火は燃えていた。櫓は春伐つて冬焚くが、燃

えやすい椿や樺は生櫓である。古い民家の中は薄暗い
がそのために炬火は美しかった。

夜、斎藤葉山（ようざん）の家で句会があり、私達は
老夫婦二人きりの大きな家に泊まった。屋号は広沢と
いう。（筆者注・この家の養子さんは奥さんの弟で、元
松江市長、斎藤強である。）

しぐれては天の漏れ日に隠岐枯るる
炬火たのし焚くは柞櫓はせつばき櫓
火雫をこぼして櫓のよく燃ゆる

（筆者注・左の句は角川の合本俳句歳時記に
載った句である。斎藤一菜は「うちの雪隠が歳時記に
載ったか。」と「機嫌であった。」）

炬を焚いて島の厠は真の闇
炬話に燃え次々に流人現れ
流人史になほ濃き冬の天の川

壇鏡の滝

那久の集卵の自動車に便乗して、一菜、葉山、春蘭の
案内で時雨の中を壇鏡神社に行く。排仏騒動に遇った
光山寺跡を見て、柱石にされているという流人安兵衛
の墓石を探すが見当たらない。途中は海を隔つこと遠
くない島内なのに深山幽谷の趣きがある。真つ赤な山
こんやくの実が珍しい。

壇鏡神社は巨杉立ち並んで樹齢百年を越ゆるものば
かりで、落ち葉敷く参道が川沿いにつづき、社の右に杉

と桂の大樹の間にうすうすと高きより一すじに落つる
滝が現れ、高さ十七丈、那智の滝を思わせてまこと神の
滝の感がある。

あら高き滝ひとすじにしぐれつつ
滝裏に枯木ぞ立てる観世音
裏見して滝は吹雪のごとく落つ
流人躬都良尋ね尋ねて冬の山

隠岐紀行その二・『菜穀火』昭和三十八年五月号

後鳥羽後醍醐

御火葬塚森は暗くて隠岐は雪
初雪は隠岐に残れる悲歌に降る
悲歌の声津々浦々を泣き枯らす
炭火濃し海土村上の蹴鞠見る
島に伝えし蹴鞠の庭に雪が降る

国賀断崖

断崖にのりあげている大枯野
火柱のごとく虹立つ冬の海
島枯れて銀河の裾の怒濤音
解説をさせていただくと、当時の隠岐丸は夜航海で
あった。安来港を出て、境港を経由して、浦郷港沖に着
くのが午前四時、舳舟に乗り換えて、港に着く。新任の
教師が赴任の時、港が近くなると提灯がひとつ、校長が
出迎えていたという。都万港沖を経由して西郷港着岸

が午前七時頃である。朱鳥が着いたその日、二十五日に第一回隠岐島俳句大会が開催された。高台の料亭「寿」の隣に、この年、昭和三十七年に竣工なった隠岐文化センターが会場であった。主催したのは三十二歳の青年教師、「雪解」同人の増本春蘭であった。二十七名の出席であった。二十六日には都万村那久を訪れ、斎藤葉山居に一泊、二十七日にはトラックで壇鏡の滝行きであった。松本たかし没後、「俳壇の貴公子」と言われていた野見山朱鳥は、ホトトギスの巻頭をしばしば得て、第一句集「曼珠沙華」の序文を、高浜虚子は「さきに茅舎を失い今は朱鳥を得た」一行だけの文字で埋めた。戦後のホトトギスのスターであった。隠岐旅行の八年後、昭和四十五年二月、五十二歳で逝去した。

第二回隠岐島俳句大会は昭和四十年六月十日、阿波野青畝を迎えて隠岐文化センターで開催された。第三回は不明であるが、第四回は角川源義を迎えて昭和四十五年六月、同じ隠岐文化センターで開催された。

角川 源義

角川源義の第四句集『冬の虹』は昭和四十七年十一月十五日、東京美術刊であった。四六版・箱入り、二〇八ページに、昭和四十三年冬から四十七年春までの五七三句を収める。口絵写真一葉在りし日の角川眞理。定価一五〇〇円。昭和四十五年五月二十一日、十八歳で世を去った令嬢眞理さんへの鎮魂が中心となっている。

句集の始めには「亡き眞理のために」と前書きがある。令嬢眞理さんに関した句を三句紹介する。

節分の 鬼面 福面 眞理 出でよ

聖 五月 いくたび 家によぶ ことぞ
冬うぐいす 業深き にや 眞理消えず

角川源義は昭和四十五年六月、自殺した眞理さんを失つての傷心の旅に出る。富山生まれの源義は、隣県、福井県丸岡町出身の俳人、皆吉爽雨（みなよしそうう）を高く評価していた。俳人協会の副会長という役職もあつたが、源義の後押しがあつたからであろう。爽雨は虚子から「ホトトギス」の編集を依頼されたが、俳句誌を刊行する気持ちがあつて辞退、昭和二十一年、「雪解（ゆきげ）」を創刊した。「客観写生を基本に、花鳥諷詠の自然と人生を凝視する」という俳風で師系は高浜虚子。地味な俳人であつた爽雨をマスコミに出したのが源義であつた。そして、昭和四十二年、その年最も活躍した俳人に贈る第一回蛇笏賞を爽雨に授賞した。

傷心の旅を勧めたのは皆吉爽雨、隠岐には雪解山脈の一つがあり、十数名の同人がいた。長老、斉藤一菜（いっさい）を代表として、幹事、増本春蘭の隠岐雪解俳句会が源義を歓待したのである。

解説を加えながら、源義の隠岐の俳句を紹介する。羽田―伊丹―隠岐と空路の隠岐行きであつた。そして島後（どうご）―かつては道後―山陰道の前が道前―そのうしろが道後なのである。南海道の四国の道後

と同じである。隠岐の地名は松江藩の役人の書き誤りが多く、地名の研究は困難を要する。)の西郷港から島前に渡った。同行は、源義主宰の俳誌『河』編集長の草村素子であった。出雲から『河』同人の桑原視草、後長耕浦も同行した。

隠岐

「次に隠岐の三子の島を生みたまひき、またの名を天の忍許呂別。次に筑紫の島を生みたまひき。この島も身一つにして面四つあり…」『古事記』国生みの段

梅雨雲や影絵のごとく三つ子島
麦藁帽ただよふ海の紺のなか

西郷港

島への荷放り出さると白き蝶
島の娘のはらはらと来て梅雨荷とく

西ノ島別府

焼火山は、海上交通安全の神を祀つてある焼火山神社がある。北前船航路の要衝であり、北前船はここを通過する時、焼火山を前にして松明を灯してイベントを行なった。北斎、広重共に、焼火山沖の北前船を描いている。

黒南風や焼火の山は眉のごと
篁に夕けむりたち梅雨けしや
流人仕分けの浜は島前においては別府であった。浦郷、知夫、海士へと送られた。

遠流びと仕分けの浜の海月かな
松山に後醍醐天皇配流の黒木御所址あり
鳶の輪の行宮を辞しつっじ燃ゆ
子燕やとどろとどろと船戻る
中の島海士町、後鳥羽院火葬塚

うっぱ咲く寺井くらしや海士の村
海士町名馬寿号の墓。露将ステッセル乃
木大将に贈りし馬なり

夏よもぎ將軍の馬隠岐に死す
後鳥羽院崎港に上陸後、三保神社に一夜
やどる

荒神の蛇縄暑しや岬の松
蚊の声や遠流の一夜岬神と
火葬塚眼にまざまざと夜の蛙
西郷町玉若酢命神社。神主億岐氏は古代
の隠岐国造の裔

宝物殿にある駅鈴は、国司が都へ行く時に人馬を徴用できるもので、なぜか国内に残っているものは、この神社の駅鈴のみで国宝となっている。

駅鈴ふれば島祖のこゑ薄暑来る
磐座に玉水わかせほととぎす
たかなや隠岐に渡来の八百比丘尼
青梅や島といへども国分寺
椎若葉寺銭となる牛相撲
島後西海岸にあるのが那久崎、旧都万村那久地区に

ある。沖の左側は島前の島々が浮かび美しい風景であり、右側は水平線、はるか彼方は朝鮮半島である。地区の浜那久は八十軒、上那久は百軒と言われていたが、現在は四十軒、四十軒、計八十軒の集落である。隠岐雪解俳句会の長老、斎藤一菜はここに住み、俳句仲間もここに住むか、ここの出身である。

都万村那久の磯

雲丹割くや磯の流木まな板に
島見する鷹巖頭に鮑焼く
壇鏡神社は都万村那久の氏神、地区から三^キの奥山に鎮座している。左に女滝、右に男滝、高さ四十^トの飛瀑である。

壇鏡神社

花桐の道幾まがり神の滝
岩ぶすま滴るごとき滝に逢ふ
弥陀まつる滝の裏見に俳の使徒
たんぼぼの穂絮放つよ隠岐幾日
野茨や隠岐の神々訪ね行く
伊後海岸

山帰来神生れし海けぶるかな
松の芯白き礁に神上がる

一 休閒答の伝説の浄土ヶ浦

松風の青浄土かな海芋咲く
青梅雨のテープ五彩に島の情

石見路は人麿ばかり梅雨茫茫々
隠岐の傷心の旅は、源義、五十三歳の時であった。昭和五十年十月二十七日、肝臓ガンのため逝去。五十八歳であった。

平成七年、角川書店の『短歌』八月号の巻頭写真は隠岐西ノ島の「シャアラ船」である。子どもたちが十人くらいも乗れる竹とワラで出来た豪華なものである。その写真の左に源義の長女、辺見じゅんの短歌が一首、載っていた。

隠岐の島精霊船にまみこらす父のうたへる神々さぶし
まみーひとみ

句集『冬の虹』のあとがきの一部を紹介する。

悲劇は突然前触れもなくおとずれる。末子眞理を亡くし、鎮魂の句業がいくばくか生じた。眞理は遅れてこの世に生を得たので、大学を卒へ嫁ぐ日までは生きながらへねばならぬと、ひそかに人生の設計をたてていた……しかし、眞理の死によって、私は終着駅を失ひ、乗換駅でまごまごし、別の目的地さがしを始めている。眞理を野辺に送った日から氣力を失ひ、何事にも手のつかぬ日々をすごした。年齢に似合はぬ晩年の意識が生じた。

源義主宰、編集長、草村素子の俳誌『河』の昭和四十六年五月号に草村素子の絶品の随筆が掲載されているので、紹介させていただきます。

草村素子（もとこ）

大正八年十二月一日生まれ。舞鶴高女在学中に短歌誌『あすなる』に加わる。昭和十七年結婚し上京、五島美代子に短歌を学ぶ。昭和二十五年、角川書店に入り、角川源義に俳句を学ぶ。昭和三十三年、源義主宰の俳誌『河』創刊時に編集長となり、その発展に尽くした。昭和四十九年八月三日逝去。五十四歳。京都出身。本名は幸枝。句集に『家族』など。

磯の宴

草村素子

船が道後の西郷港へ着くと、土地の数人の俳人が出迎えて下さった。

島根の後長耕浦さんが、一度主宰を隠岐へ案内したいと何年も前から計画していた。それがやつと実現し、桑原視草さんと私がお伴に加わった。道前を二三日ゆっくり見物してから、そのとき、道後の港に着いたのであった。隠岐へ来て知ったが、隠岐には島が四つあり、二つずつ道前、道後とわかれている。

迎えて下さった方々とは皆初対面であった。予定がつまっているらしく早速車で国分寺跡へ向かう。ここには後醍醐天皇の行在所跡があり、島にただ一つ残る牛突きもある。行在所跡に佇つと、しき

りにほととぎすがないでいた。島は排仏毀釈が激しかった所という。樹の根許などに石仏がごろごろ積み上げるように捨ててあって、異様な感に打たれた。

隠岐総社一の宮へ行き、駅鈴というものを見た。それから車は一路島を横断している感じであった。一行四人はどこへつれて行かれるのか、すつかりまかせ切りでいた。

私は峠の茨の花や卵の花、松の芯などをたのしんでばかりいた。島であることを忘れるほどで、ところどころに田植の光景も見られ、麦秋のけしきもある。山には杉がとうとうと茂っている。この島は昔から林業がさかんだという。案内の一菜さんという俳人はその美林を誇っていた。そのためか村は裕福に見えた。ゆくさきぎきにたわわの卵の花は、花が大ぶりで、雨後のみどりの中に浮き立つような白さだ。こんなに沢山の勢いのよい卵の花を見たことはない。

車は磯に出た。那久海岸という。小さい漁村を抱いている。突堤に一隻の船が着いていて夫婦で網を手繰っていた。仕事を終えてきたようだ。ふと船底を見ると、その日の漁か、飛魚が重なり合って、梅雨晴れの日ざしに光っていた。目のさめるような色である。私は大声でみんなを呼んだ。飛魚がこんな色をした魚とは知らなかった。いささか船と

車の旅に疲れをおぼえていた私は、この紺青とも藍とも何とも形容しがたい生き生きとした色に蘇った思いがした。

一菜さんが漁師に、「一寸あそこまで行ってくれんか」と向こうの入江を指さすと、漁師は快く引き上げ、私たちを乗せてくれた。海は鏡の如くという言葉通り、平らで、土地の人たちもこんな静かな海は年の内数えるほどだという。

目ざす灯台の下の磯に煙がもくもくと上がっていた。又々私は歓声を上げた。そこで、昼食のもてなしの用意が出来ているのである。煮炊きして煙が出るということを久しく忘れていた私であった。船を降り、岩を飛び飛び炊煙の方へ行くと船虫がはらはらと散る。水はすき透っている。七八人の男たちが学生のキャンプのように立ち働いていた。流木で俎板を作り、一層大きい流木で食卓を作り、その卓の上には、壺焼、あわび、たこ、いか、うに、飛魚、その外名も知らない貝類が山盛りに料理されてあった。ござを敷き、席はすっきりととのつている。彼らは朝から支度にかかっていたのであるうか。私も一緒になって炊きさんをしたと思ったが、手を出すすきがない。

真上に灯台が輝き、筵のまわりには昼顔や浜えんどうの花が咲き乱れている。磯山では小鳥たちがさかんにさえずっている。私たちはこの意外な

もてなしに感激するばかりであった。

頃を見はからって、モーターボートが村までさつと往復してくると、冷え切ったビールが運ばれて来た。冷え切ったビールは、下戸の私にも又々感激であった。

食べろ食べろとさかんにすすめられる。次ぎ次ぎと生づくりの料理がある上、ある上にと運ばれてくる。聞いたことも見たこともない貝を焼いてはすすめられる。何貝とかいう貝のお汁もみんなはおいしい、おいしいとお代わりをした。汁にしては蛤やあさり、しじみはとも及ばない貝だと彼らは自慢した。汐木で酒をぬくめ、御飯を炊き、その火の傍でうにやとこぶしを焼いてくれる。うにやとこぶしは殻にこげついたりしていたが、それがまた青空のもとで一層の野趣を私はよるこんだ。私は不作法に、食べた殻をほいほいと辺りの渚に投げた。

はじめの内は一緒にと誘っても近づくかず、少し離れたところで岩に腰かけて食べたり飲んだりしていた料理方たちも、酔うほどにだんだんこちらに合流し、はては手拍子でしげさ節など出る有り様となった。

海水で磨ぎ、真水で炊いた御飯は、ほのかに塩味があつておいしかった。

遠くの岩の上で鷹や鳶が、珍しい宴を何事ぞ、と

見下ろしていた。すきあらば攫おうとねらっていたようだった。

きけば今日の賄さんたちは俳人ばかりではなかった。モーターボートを持った運びやさんは山林持ちの村の若旦那、料理方は宿屋の主人、貝、魚を集めたのは本ものの漁師、それぞれ皆今日の催にみずからかつて出たのだという。あの人たちにとつて俳句は全く無縁であり、来た客もどこの誰ともそんなことはどうでもよいのだろう。一期一会のころである。

卓上には食べ切れない海の幸が山盛りである。私は先ず娘に食べさせたいと思った。それから東京の仲間たちにも食べさせたいと思った。滴る生うにをいくらでもすするといふようなことは一生に一度しかないかもしれない。汐木をけぶらせけぶらせ焼いてくれたさざえを、ほじるようにと竹串をその場で削ってくれた髭だらけの漁師は、酒と潮であららしく灼けていたが、歌を唄うと透るいい声をしていた。

満腹の後は磯山に登ったり、岩から岩へ渡って珍しい浜の草花を摘んだりした。

モーターボートの主は先生と私に乗れという。いわれるままに乗ると、猛スピードで走り出した。飛魚が彼方をボートに並んで翔けた。奇岩の洞をくぐったりして湾を一周した。殆んど口をきかな

かったが、彼のサービスだったのだ。

隠岐数日の旅を終え、帰りの連絡船の中で、案内役の後長さんは、何が一番印象に残ったか、と聞いた。私はためらわず、「磯の宴」と答えた。

勿論自然もすばらしかった。牧畑の放牧、国賀海岸の奇勝、奇岩、後鳥羽上皇十九年の行在所跡、牛突き、さぎさぎで聞いたほととぎす、島をおおうように咲いていた卯の花、みんな近來にない楽しい旅であった。が、那久海岸の饗宴は終生忘れられない思い出となろう。

帰って何日かして、島の女の俳人から、「是非又冬の怒濤を見に来て下さい。隠岐は冬が一番隠岐らしいのです。」という便りをもらった。私はあの轉りや蝶や、浜えんどうの咲いていた灯台下の磯に打ち寄せる激しい怒濤を想像してみた。おそらく再び渡ることはないであろう島を、攻め、囓む怒濤は、私の頭の中で大きく激しく広がっていった。人とのめぐり逢い、そして人情、それらは生きていることの楽しみでもある。

草村素子の名文である。四年後に逝去、そして源義は五年後に逝去している。

島後、島前の地名を本来の道後、道前と表現しているのは、道中に話題となっていたかもしれない。「隠岐総社一の宮」という表現があるが、これも話題となってい

たことであろう一の宮は旧五箇村の水若酢（みずわかす）神社で、旧西郷町下西の総社が社家の億岐家に駅鈴のある玉若酢神社である。水若酢神社の忌部正孝宮司によると総社は東の守り神、一の宮は西の守り神と理解していたければ、ということであった。

灯台のあるところが那久岬である。灯台の下の磯は岩だけでなく石浜となっており、磯遊びにもってこの磯である。お代わりをした貝の汁は「カメノテ（亀の手）」である。石灰質の殻をもつ固着動物、三、四で、甲殻類、フジツボ目ミヨウガガイ科に分類される。岩礁の割れ目に群生して、亀の手に似ている。殻の中の肉は食用となり、殻のまま吸い物にすると絶品で、隠岐では吸い物の最高品である。

「モーターボートを持った運びやさんは山林持ちの村の若旦那」、阿部圭次氏である。鳥取高等農林（現・鳥取大学）卒、後に旧都万村村長となる。那久岬を末端とする横尾（よこお）山系の海岸部の山林はほとんど阿部氏のもの、職業に就いたのは、一年間、母校の中学で理科、英語、体育の講師をしただけである。音楽とスポーツを愛して悠々自適の生涯であった。また従兄弟に俳人がある。辻桃子主宰の俳誌『童子』の編集長、安部元氣氏で、辻桃子の夫である。那久岬で育った少年は、今も少年の心を持つ俳人である。

美林で「村は裕福に見えた」とあるが、その通りで、村人の一人は大蔵省参事官という高級官僚にまで昇り

つめた。モーターボートは、当時、隠岐には、この一隻だけであった。「ザ・ガードマン」の隠岐ロケがあった時には、貸車のお願いがあり、那久岬から西郷港へ入った時、「宇津井健と間違えられた。」と阿部氏は笑っておられた。

「髭だらけの漁師は酒と潮であららしく灼けていたが、歌を唄うと透るいい声をしていた」安部守正氏である。隠岐雪解俳句会幹事（当時、西郷小学校教頭）で那久出身の増本春蘭は源義たちに、この漁師は若い頃は、アラフラ海で真珠貝採りの潜水夫をしていたと説明をしたという。安部氏の従姉妹の主人が真珠貝採りの船会社を東京で経営していた。三味線、尺八、何でもござれの音楽通で、彼の唄った「しげさ節」が、傷心の旅の源義の心に変化沁みたということであった。源義は、赤坂の料亭以上の「磯の宴」であったとのちに回想している。若旦那、漁師、宿屋の主人、共に、那久の雪解の俳人仲間とは昵懇にしている飲み仲間なのであった。そして源義、素子、若旦那、漁師、宿屋の主人、一菜、春蘭、皆、冥界に入られた。源義、素子も特別な関係であったということは周知の事実であるが、文学博士であり、俳人であり、社長でもあった源義を中心とした「磯の宴」のドラマは、後世に伝えたい思いである。そして、「雲丹割くや磯の流木まな板に 源義」の句を灯台の下の磯に句碑として建立したいというのが、筆者の夢である。

石原 八束

大正八年、山梨県に生まれる。中央大学法学部、同大学院卒業。昭和十二年より飯田蛇笏に師事。二十一年より五年間、蛇笏主宰の『雲母』を編集。三十六年『秋』を創刊、のち主宰となった。日経俳壇、東京新聞俳壇選者。詩人の三好達治研究の第一人者として有名であった。平成十年七月十六日、呼吸不全のため逝去、七十九歳であった。

五十五歳の時、昭和四十九年十一月二十三日から四日間、隠岐島内を吟行した。「隠岐の唱」三十六句を巻末の章にまとめた第六句集『黒凍みの道』を昭和五十年に牧羊社から出版し、昭和五十年年度芸術選奨文部大臣賞に輝いた。筆者の解説を加えながら、その句集から句を紹介する。

隠岐の唱

袈裟がけに神等去出の雷海を裂く
石原八束夫人は精神を病んでいるとは、東京神田の俳句・ロック専門古書店「文献書院」のご主人から伺ったことがある。隠岐へ渡った翌年の五十年の暮れに夫人は逝去されたとのことであった。「文献書院」は娘さんがロックのほうを担当している。

家人を病院においてひとり隠岐に渡る
宿世断つ神等去出の海渡りけり
野見山朱鳥にしても角川源義にしても那久岬、壇鏡

滝を訪れているが、どちらとも西郷港から三十キ位離れており、観光コースから外れているが、案内役の増本春蘭の故郷であり、斉藤一菜が住んでいる故のことだからである。また、風光明媚さも隠岐の他の観光地にまさるともおとらない場所でもある。山口誓子も昭和四十五年に訪れ、壇鏡神社には平成四年六月二十七日に建立された「捨身とは天より瀧の落つること 誓子」という句碑もある。

亥北沖西風の那久岬怒濤かな
隠岐枯れて空の波紋をたたみくる
黄落の壇鏡溪の山椒魚
しぐれ瀧降る高杉の壇鏡溪
石原八束、小早川蘇宇、伊藤麦城、増本春蘭、山下通勝の五人が那久を訪れた。小早川、伊藤は八束主宰、「秋」の島根の仲間、増本、山下は「雪解」の仲間、山下は境港出身で西郷海上保安署勤務であった。

島後都万村、斎藤一菜家

梁黒く楷火に光りて客五人
旧都万村釜谷(かまや)地区にある国民宿舍羽衣荘に八束が一泊した夜、小句会が催された。五、六人の句会であったかと思われる。筆者も参加した。その折り、八束が、「この宿の側にある海に面した舟小屋、川沿いの舟溜まり、ここに一年暮らして、舟小屋、舟溜まりの春夏秋冬を詠んでみたいと思いますねえ。」と言われた。

西隠岐の舟小屋脇の残り菊

舟小屋の屋根石を吹く亥北西風
隠岐高田山の麓の稲架襖
柿吊るす隠岐都万村の舟だまり
「隠岐の二字の地方性を詠んでほしい。二字の名詞は
日本語の基本だが、離島に残っている。タ行の地名が並
んでいるのが面白いと思つた。」

蛸木・津戸・都万としぐれ来海の隠岐
舟小屋に木枯の星並びけり
大満寺山より時雨る棚田刈り
玉若酢神社八百杉
二千年杉の寄生木 榿紅葉

同、億岐家

既鈴二つ残り隠岐しぐる
隠岐国分寺址木枯にまかれをり
流人墓地みな壊えをり 鯛起し
島後最北端 二句
磯馴れ松の白島崎の鯛起し
鯛起し後は怒濤の隠岐の虹
島前中の島 七句

行在所趾杉落葉かく誰ならむ
「蛙鳴くかり田の池の夕たたみきかま
しものは松風の音後鳥羽院」
後鳥羽院刈田の池の木の葉舞ふ
落葉ふる隠岐の水無瀬の御火葬塚
白き鳥賊干す木枯となりにけり

鳥賊五百干して月さすいかなだら

(註) 鳥賊なだらは鳥賊干場

隠岐の月ちりちり寒しいかなだら
一夜干の一夜しぐるるいかなだら

島前西ノ島 九句

枯れきつて国賀大崩崖の放ち牛
崖の上の黒牛の群 翹雲
崖の国賀冬の茜を海に張る
絶壁の国賀の怒濤冬日落つ
山帰来流人の島に波あがる
雪来ると隠岐の崖肌波げむる
焼火山月ふくれきぬ国賀暮れ
屋並より高処の墓地や隠岐の雁
黒猫がある高窓のからす瓜
平成四年十一月十六日から四日間、再び八束は来島
した。『NHK 趣味百科 俳句』の「俳句紀行 隠岐
を詠む」の取材旅行であった。編集者とカメラマン二名
が同行した。

以上の稿を書くにあたって、月刊のワープロ印刷の
隠岐雪解俳句会報が大いに参考となった。幹事であつ
た故・増本春蘭氏の作成のものである。貴重な写真とと
もに、編集後記は隠岐俳壇史とも言えるものである。

(松江市立女子高校非常勤講師)